



ゴブリ
雌
にな
るま
で
の
た
ち
の

ラン
サー
アル
トリア
編

R-18
ADULT
ONLY

ROYALBITCH



一人でそこを
訪れたのは
いかなる気まぐれ
からだったか。

聖槍も持たず、
供も連れず、
王は一人、下等な
魔物の巣に向かった。

ここがゴブリンの
巣穴、ですか……

草むらの陰から、
岩の隙間から……
じつと警戒の
視線が注がれる。

縄張りに入ってきた
侵入者……
人間の雌……

だがゴブリンたちは
息を潜め迂闊な行動を
取らない……

慎重で臆病な
魔物なのだ……

そう警戒せずとも、
こちらは丸腰です

王の
言葉の調子は
柔らかかった。

カキ

カキ

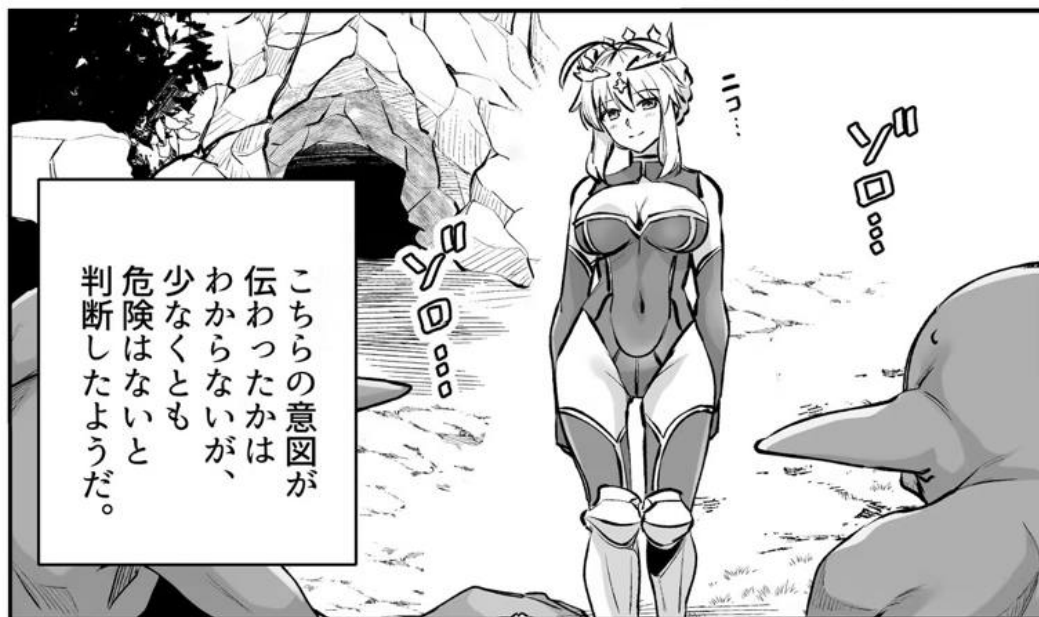
カキ

カキ



鎧を外し、
手を広げて、
害意がないことを
ゴブリンたちに
伝える。

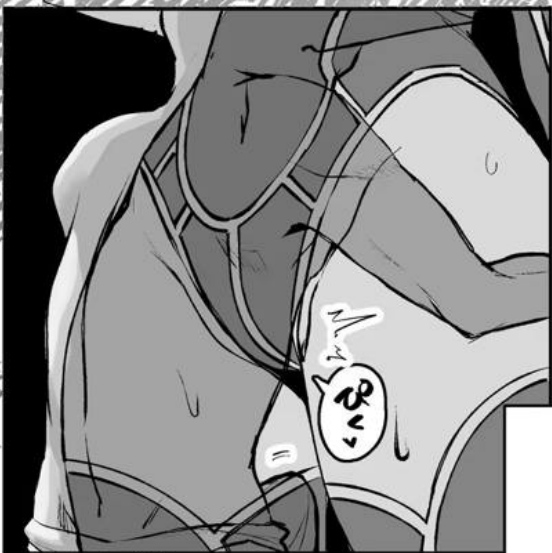
ほら、大丈夫
でしょう？



こちらの意図が
伝わったかは
わからないが、
少なくとも
危険はないと
判断したようだ。



もつとも、戦闘に
なったとしても
王とこの下等な魔物では、
たとえ裸でも相手にすら
ならない……



彼女にとって
何も危険はなかった

ただ一つ、
己の内に潜む
もの以外は……

エムン……

エムン……

ギギ……

ズザ……

ゴブリン——
森に棲む、小さな魔物。
さして強い魔物ではない。
他の魔物に比べて、
危険性ははるかに低い。

特異なのは、その生態——
特に、繁殖戦略だ。

ゴブリンに雌はいない。
自分と同程度の大きさの
哺乳類の雌なら
どんな種でも孕ませ、
ゴブリンの子を
産ませることが
できるのだ。



ビクッ...

ゴブリンたちは
これらの雌の匂いに
特に敏感な鼻を
持っている。

雌が発情した
ニオイを嗅ぎ取ると、
たとえ相手が
人間であつても
彼らの生殖本能が
刺激されるのだ。

例えば、ヤギや羊、
馬、牛、大型の猿などが
その交尾対象になる。
もちろん、人間の雌も——







ドキ

彼らは、雌の
身体から立ち上る、
微かな香りを
かぎ取っているのだ。

ドキ

ドキ

んっ……ふふ、
伝わりましたかね

ドキ



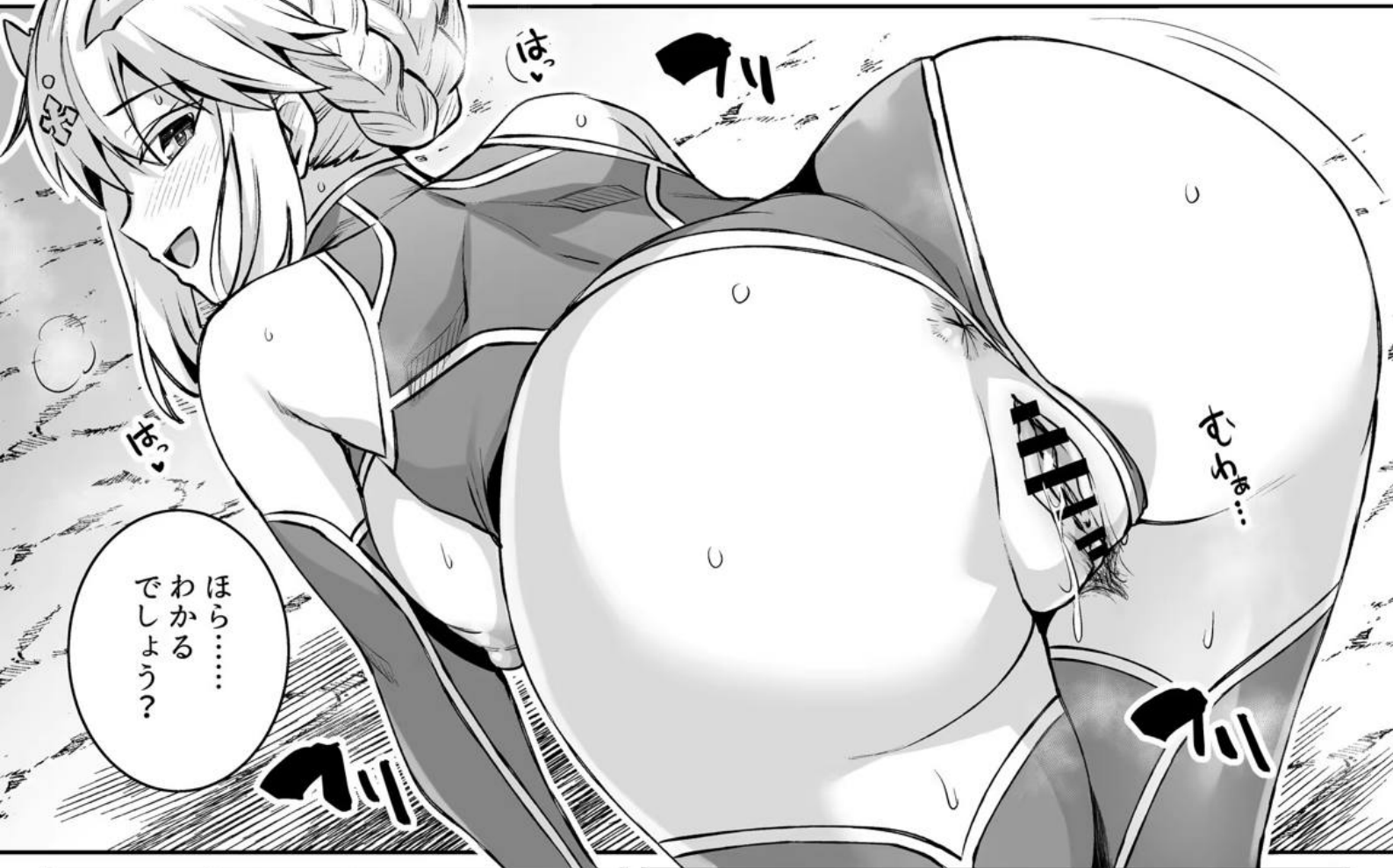
「彼らの小さな脳に、
この雌は交尾を
望んでいる」
という単純で強烈な
シグナルが送られる……。

ドキ

ぐわっ



そう……
この巣穴に来た
理由は、自ら、
この下等な魔物の
慰みものにな
るためだ。



ほら……
わかる
でしょう？



みるみるうちに
その股間が
固く勃起する。



スンスンと
鼻を鳴らして、
王の股の匂いを
嗅ぐゴブリンたち

これから
小鬼たちに
犯される

その事実が、
王の中で
酷く甘美な
もののように
感じられた。

ほら、
来てください……

あ

わ

あ……

人間の女性を襲い、
集団で乱暴に犯す
というイメージに
反して……

実際のゴブリンは
雌との交尾を
かなり慎重に行う

自分たちより
大きな種族の雌は、
非力な彼らにとつて
常に脅威なのだ

おずおずと、
一匹の勇敢な
ゴブリンが前に出る

どうぞ……
怖くないですよ

あなたのための
穴です……♡



下等な小鬼が
一生懸命に
交尾しようと
試みる……



ああ、犯される……
犯されるのですね……
私は、ゴブリンに――



興奮と羞恥で
王の頭の中は
いっぱいになる

心臓が早鐘のように
ドクドクと鼓動し
――
全身が震える――





くふう……っ♡
こっ……
これは……!

うううっ……♡
よ、良いです……♡

みちゅ……♡

みちゅ……♡

その小柄な体軀からは
想像もできないほどの
ゴブリンの生殖器は
大きかった

すず……♡

王の膣口が限界まで
押し広げられ
ペニスの先が
子宮口にまで届く

ゴブリンの
カウパー液に含まれる
特殊な魔力成分……

種を超えて「雌」に
対して、強い快感を与え
排卵を誘発する。

これによって彼らは
異種族の雌との
交配を果たすのだ。

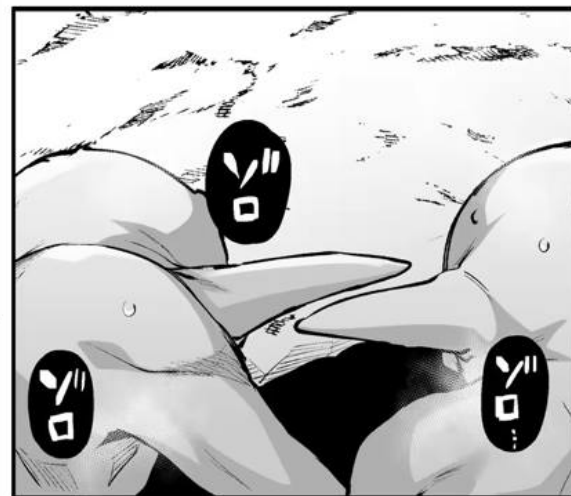
本能に直接
叩きつけられる
ような快感――

ふうっ
……
♡

様子を伺っていた
他のゴブリンたちも
じりじりと
近づいてくる……



近づく他のオスに
取られまいと
するのか
王と交わっている
ゴブリンが必死に
腰を振る……



そのがむしやらな
性行為が、
余計に王の身体に
熱をともしっていく――

はあっ……！
くうっ……！

そんなことを
知るわけもなく――
小さなゴブリンは懸命に
腰を振り、己の子種を
王に送り込もうとする

そんなことを
知るわけもなく――
小さなゴブリンは懸命に
腰を振り、己の子種を
王に送り込もうとする

心配せずにつ……
 気持ちよくなつて
 大丈夫っ……♡

心配せずにつ……
 気持ちよくなつて
 大丈夫つ……♡

くうくうくうくう



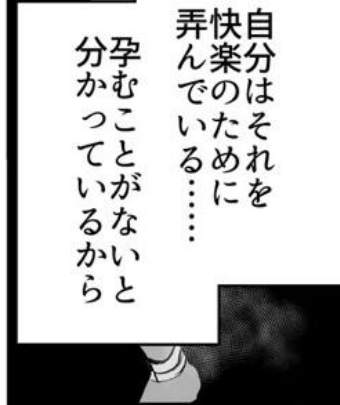
ふふ……
上手でしたよ……
とても……



王の心にちくりと
罪悪感が痛む



このオスは必死に
自分の子孫を
残そうとしている
だけなのに



自分はそれを
快楽のために
弄んでいる……
孕むことがないと
分かっているから



背徳感と興奮の
入り混じった、
甘美な絶頂――

ゴブリンのペニスが
激しく脈打ち
王の子宮に精子を
注ぎ込む



ええ……
あなたがたも皆の
私と交わりたいの
です……♡

王の心が
高鳴る



このゴブリンたちに
とって……
私はただのメス
でしかない……

そのことが
何よりも——
凍てついたこの心に
安らぎを与える



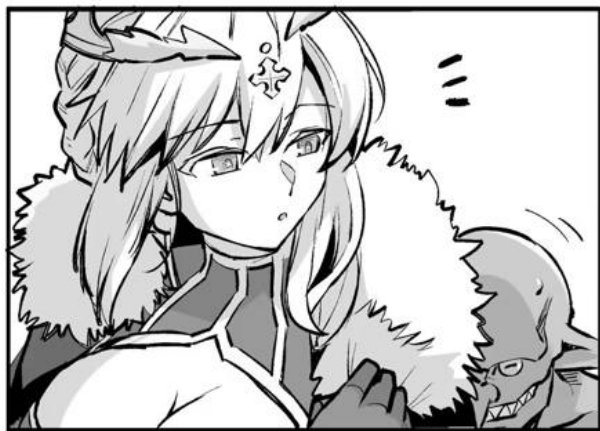
ああ、融ける
融けてゆく……



誇りも、立場も
責任も、全て——

溺れる。





また……
来ますから……

ね……？



やさしい声で、
そう約束した自分に、
王は驚いていた。

自分の中に
決定的な何か
刻まれた
そういう感覚……



千々千々……

ボム……

トーン……

トーン……

それから、
幾たびも同じことが
繰り返された

ゴブリンの巣穴を
訪れては、彼らの
欲望に王は身を任せる

ザッ

そうするうちに、
王の中では
一つの感情が
膨らみつつあった

はっ
はっ
はっ

王として、いや
人としてあるまじき、
下劣な感情……

鎧を脱ぐ時間も惜しみ、
最初から軽装で
訪れることもあった

ドゥ……

ドゥ……

ドゥ……

ドゥン

ドゥン

ドゥン

ゴブリンの子を
孕みたい――。

は……

は……

ドクン……

ドクン……

ドクン……

ドクン……

ト……

今や、王の心は
その一念によって
占められていた……。



いくたびもの訪問で
すっかり
ゴ布林たちは
警戒しなく
なっている……



……今日は
お願いがあつて
来ました





私を——
あなたたちの群れに
加えてください



それでも、王は
満足そうに頷いた



ゴブリンたちは
王の言葉を
理解していない

ただメスの身体に
群がっているだけだ



巢穴となつてゐる
洞窟の奥深くに
足を進める

入口からの光が
一切届かない
生温い暗闇の領域

ゴブリンたちの
大きな瞳孔は
夜目が効く

王も暗闇の中
魔力探知によつて
小鬼たちの気配を
探ることができる

もつとも——
見えなくとも
不便はなかった

もうどこにも
行くことはない

今や、ここが
彼女の家であり
終着点なのだから

……貴方は
いつも真つ先に
来てくれますね

王が訪問すると
いつも必ず
一番に交尾に来る
個体だった

アッ



アッ

長く観察すると
ゴブリンたちにも
個性があることが
分かってくる……

私のことが
気に入るか？



クス……

王はそう言う
愛おしい
そのゴブリン
の口づけする
ペニスに

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ

湿った接吻の音が
ちゅっちゅっ
と洞穴の間に響いた

ちゅっ

選べるわけ
ではないが……

もし、最初に孕むなら
この小鬼の子を
産んであげたいものだ

もつとも……
そんな風に
思う必要はないの
かもしれない……

これから
この巣のゴブリンたち
全てによって――

何度も孕まされ
何度も子を産む
ことになるのだから

時間は
いくらでもある



粘つく闇の中で
王は小鬼と
交わり続ける

一匹が射精すると
また次のゴブリンが
交尾を求めた



王はそれを
満足そうに
受け入れ続ける



交配可能とはいへ
異種族なのだし
着床の可能性は
高くない

まして、魔力に
抵抗のある
王の身体だ

繰り返し繰り返し
交尾すること
必要だった

ああ、それでも
きつと……

ちゅっ

ひよっとしたら
今なのかもしれない

ちゅっ

今、私の中に
宿ったものが、
それなのかもしれない

新しい、命なの
かもしれない……

ドクン…

暗闇の中で
王は直感していた

ドクン…

ドクン…

ドクン…

ああ、きつと
子を、孕んだの
ですね……

ドクン…

ちゅっ

妄想、あるいは
錯覚だったの
かもしれない

だが、王は
自分の身体の奥
子宮のどこかで

自分の卵子と
ゴブリンの精子が
結びつくのを
確かに感じた
と思った



そのことに王は
ひどく満足していた

自分が人間の王から
「ゴブリンの雌」に
なったことに

奇妙な安心と
充足を覚えるの
だった……



はたして
王の直感
通りだった

はっ

はっ

大きく膨らんだ
腹の中には――
ゴブリンの子が
育っている……

はっ

貴方の子、
でしょうか？

それとも、
そちらの？

やっ

王の問いに答える
者はいない

ゴブリンたちは
甲斐甲斐しく王に
餌を運び、王の世話をする

それはどこか、
女王蟻に給餌する
蟻たちの生態を思わせた

もつとも……
妊娠中も変わるはず
交尾を求めるのは
ゴブリンらしい
習性だった……

おそらく複数の子を
同時に孕ませる
ことができるの
でしょうね……

自分より大型の雌と
交配するゴブリンの
特殊な生態のもの
しれなかった

実際、誰の子かは
分からなくとも
王にとっても
別に構わなかった

これから
何匹でも生む
つもりだったから



おっ……♡
おっ……♡

良いです……
すごくっ……♡

暗闇の中に
王の甘えたような
媚びるような
嬌声が響く

ゴブリンの子を
妊娠した雌は
次第に肉体的にも
精神的にも
変質していく

乳房は肥大化し
乳首は大きく長くなる
尻も繰り返す出産に
耐えるように
大きくなる……

ズンッ

ズンッ

ズンッ

ゴブリンとの交尾で
とめどなく快感物質が
分泌されるようになり
至上の幸福を感じる

こうして
「ゴブリンの雌」は
完成していくのだ……



もっともっとと
犯してください♡

アルトリアの
いっぱい腹マコを
何度だって
孕ませて♡



そこには王の威厳も
人間の女性としての
尊厳もなかった

ただ代わりに
ゴブリンの雌としての
安心感と充足感
そしてとめどない
幸福感と快感があった

やがて……
出産の時が来た

あ……

ゴブリンたちが
王の身体に群がるのは
繁殖のためではない

っう

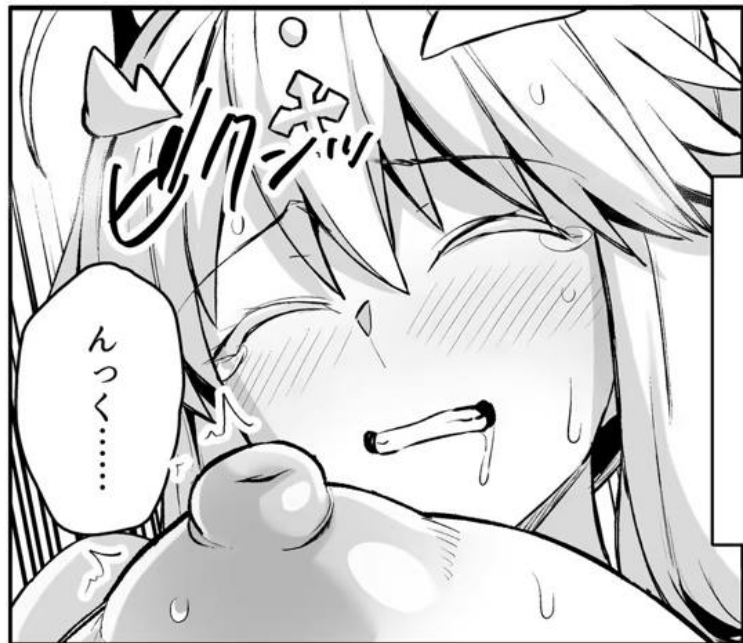
あ……

雌が苦しそうな表情を
すればするほど
ゴブリンは交尾行動を
強化している

交尾によって
雌に分泌される
快感物質による
麻酔・鎮静効果を
本能的にわかつて
いるのだろう

それは通常——
人間にとつては
泣き叫ぶ婦女子を
一心不乱にゴブリンが
犯す、という非常に
悪辣な行動に見える
わけだが……

今の王にとつては
好ましかった



んっく……

ミキッ

快楽物質による
麻酔・鎮静効果が
あっても並大抵な
ことではない

ミキッ

とはいえ——
胎児ほどのサイズの
異物を出産するのは



はあっ……！

ああああっ

ゴ

王は数時間かけて
六匹のゴブリンの子を
産み落とした

はあ……

はあ……

はあ……

はあ……

はあ……

一部の
大型草食動物の
ように——
ゴブリンの子は
過熟児である

彼らは
生まれてすぐに
母乳を求めて
動き出す



ちゅっ

一つの乳房に
何匹もが同時に
吸い付く……

巨大に膨らんだ
王の乳房には
十分な母乳が
蓄えられていた

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ



ゴブリンたちは
「女王」に対して
とめどなく給餌を行う

森で採れる
木の実や果実、
小動物の肉、
さらには蜂蜜などまで
優先的に王に与えられた

その見返りとして
「女王」は常時交尾し
妊娠状態に置かれる

ばんばんばん

妊娠中すらも交尾を
繰り返し——
出産後すぐまた孕む

そして成長した
自分の子とまた
交尾するのだ……

こうして——
ゴブリンの巢は
一つの大家族となり……
異種族の「ゴブリンの雌」を
頂点として完成する

ばんばん

ズン

ズン

ズン

それは一つの小さな
自然の王国であった

小さな領土
小さな国民

森の奥の洞穴に
ゴブリンたちと
子供をしながら
ひっそりと暮らす

おそらくはこの森に
他にもこのような
コロニーがいくつか
あるに違いなかった

だが、もはやそれは
王にとつては
どうでもいいことだった

ただ食べ
ただ交わり
ただ孕み
ただ産む

それが今の彼女の
生活の全てであり

交尾の快感の中で
過去の全て
責任、重圧、誇り……

それらの一切は
夢の記憶のようにな
遠くなっていた

サマアア

なお
王の謎の失踪から
数年が経ち……

王国の混乱も
落ち着いた頃

魔物討伐中に
隊からはぐれた
一人の騎士がた
森の中で奇妙な
人影を目撃して
いる



か
失蹤して
瓜二つだ
った王と

ゴブリンたちに
守られる
金髪の裸の女性……

彼女は
ゴブリンたちを
「我が子ら」と呼び

自分たちの群れは
静かに森の奥で暮らす
人には危害を加えないので
どうか見逃してほしい、と
そう言った

さもなくば、貴公を
討つしかない、とも

騎士は、かつての王の
変わり果てた姿に
膝からくずおれると
とめどなく涙を流した

王はそんな騎士に
寄り添うと、
優しく手を取り……

王国の民を頼みます、
といって静かに優しく
ほほ笑んだ



騎士は森を去り
二度と戻らなかった

出会った場所を
明かすこともなかった

ただ……
いつしかその森は
「王の森」と呼ばれる
ようになり……

そこに住む魔物は
人を襲うことが
なかったという

ゴブリンたちの雌になるまで
——ランサーアルトリア編——

終

お読みいただき
ありがとうございます。
びびります。
久々の乳上本です。

また冬コミで
お会いしましょう。

はなみち

ゴブリンたちの雌になるまで
——ランサーアルトリア編——

発行日：2026年08月16日
発行者：haruhisky
発行元：ろいやるびっち
印刷所：トム出版様
特別支援：thar様
Harunyan様



「ここがゴブリンの巣穴、か……」

一人でそこを訪れたのは
いかなる気まぐれからだったか。

聖槍も持たず、供も連れず、
王は一人、下等な魔物の巣に向かった。

ゴ
ブリ
ン
の
乳
上
。乃
子
み
代
女
に
な
る
。

か
さ
か
さ

草むらの陰から、岩の隙間から……
じっと警戒の視線が注がれる。

「そう警戒せずとも、こちらは丸腰です」
王の言葉の調子は柔らかかった。



「ほら、大丈夫でしょう？」

手を広げて害意がないことを
ゴブリンたちに伝える。

こちらの意図が伝わったかは
わからないが、少なくとも
危険はないと判断したようだ。

下等な魔物たちは、
ソロソロとねぐらから出てきた。

「鎧も外しましょうか」

身を包む鎧も外していく。
もっとも、王と下等な魔物では、
たとえ裸でも相手にすらならない。

王にとって何も危険はなかった。



ゴブリンたちは雌の匂いに
特別に敏感な鼻を持っている。

雌が発情したニオイを嗅ぎ取ると、
たとえ相手が人間であっても
彼らの生殖本能が刺激されるのだ。

「んっ……ふふ、伝わりましたかね」
まとわりつくゴブリンたちに、
王は笑みをこぼす。

そう……この巣穴に来た理由は、
自ら、下等な魔物の
慰み者になるためだった。



「ほら、わかるでしょう？」
王は四つん這いになり、ゴブリンたちに向かって尻を突き出して見せる。

スンスンと鼻を鳴らして、王の
股の匂いを嗅ぐゴブリンたち。
みるみるうちに、その股間が勃起する。

その様子に、王もまた興奮を
抑えきれないように、尻を振り誘惑する。

これから小鬼たちに犯される。
その事実が、王の中で酷く甘美な
もののように感じられた。

「布が邪魔ですね……」
王は服をはだけた。

「好きなだけしていいですよ」

洞窟の暗がりの中で、王は尻を突き出しゴブリンを誘惑する。
これまでは、時間を気にした交尾だった。
しかし、これからは違う……。
昼夜、飽くことなく犯され続けるだろう。

そして、それこそが王の望みだった。
ゴブリンたちの、雌になること……。

普段よりひときわ強く、
発情した雌のニオイを股から発している。

先ほどのゴブリンの個体が、王の股の
割れ目を舐めながら、ペニスを硬くする。

「欲しいのです。貴方の子種が……」

王は胸の高鳴りとともに、小鬼の
挿入を待った。

「好きなだけしていいですよ」

洞窟の暗がりの中で、王は尻を突き出し
ゴブリンを誘惑する。
これまでは、時間を気にした交尾だった。
しかし、これからは違う……。
昼夜、飽くことなく犯され続けるだろう。

そして、それこそが王の望みだった。
ゴブリンたちの、雌になること……。

普段よりひときわ強く、
発情した雌のニオイを股から発している。

先ほどのゴブリンの個体が、王の股の
割れ目を舐めながら、ペニスを硬くする。

「欲しいのです。貴方の子種が……」

王は胸の高鳴りとともに、小鬼の
挿入を待った。

「好きなだけしていいですよ」

洞窟の暗がりの中で、王は尻を突き出し
ゴブリンを誘惑する。
これまでは、時間を気にした交尾だった。
しかし、これからは違う……。
昼夜、飽くことなく犯され続けるだろう。

そして、それこそが王の望みだった。
ゴブリンたちの、雌になること……。

普段よりひときわ強く、
発情した雌のニオイを股から発している。

先ほどのゴブリンの個体が、王の股の
割れ目を舐めながら、ペニスを硬くする。

「欲しいのです。貴方の子種が……」

王は胸の高鳴りとともに、小鬼の
挿入を待った。

「好きなだけしていいですよ」

洞窟の暗がりの中で、王は尻を突き出し
ゴブリンを誘惑する。
これまでは、時間を気にした交尾だった。
しかし、これからは違う……。
昼夜、飽くことなく犯され続けるだろう。

そして、それこそが王の望みだった。
ゴブリンたちの、雌になること……。

普段よりひときわ強く、
発情した雌のニオイを股から発している。

先ほどのゴブリンの個体が、王の股の
割れ目を舐めながら、ペニスを硬くする。

「欲しいのです。貴方の子種が……」

王は胸の高鳴りとともに、小鬼の
挿入を待った。

「好きなだけしていいですよ」

洞窟の暗がりの中で、王は尻を突き出し
ゴブリンを誘惑する。
これまでは、時間を気にした交尾だった。
しかし、これからは違う……。
昼夜、飽くことなく犯され続けるだろう。

そして、それこそが王の望みだった。
ゴブリンたちの、雌になること……。

普段よりひときわ強く、
発情した雌のニオイを股から発している。

先ほどのゴブリンの個体が、王の股の
割れ目を舐めながら、ペニスを硬くする。

「欲しいのです。貴方の子種が……」

王は胸の高鳴りとともに、小鬼の
挿入を待った。

「好きなだけしていいですよ」

洞窟の暗がりの中で、王は尻を突き出し
ゴブリンを誘惑する。
これまでは、時間を気にした交尾だった。
しかし、これからは違う……。
昼夜、飽くことなく犯され続けるだろう。

そして、それこそが王の望みだった。
ゴブリンたちの、雌になること……。

普段よりひときわ強く、
発情した雌のニオイを股から発している。

先ほどのゴブリンの個体が、王の股の
割れ目を舐めながら、ペニスを硬くする。

「欲しいのです。貴方の子種が……」

王は胸の高鳴りとともに、小鬼の
挿入を待った。

「好きなだけしていいですよ」

洞窟の暗がりの中で、王は尻を突き出しゴブリンを誘惑する。
これまでは、時間を気にした交尾だった。
しかし、これからは違う……。
昼夜、飽くことなく犯され続けるだろう。

そして、それこそが王の望みだった。
ゴブリンたちの、雌になること……。

もももも

ぐわ

普段よりひときわ強く、
発情した雌のニオイを股から発している。

先ほどのゴブリンの個体が、王の股の
割れ目を舐めながら、ペニスを硬くする。

「欲しいのです。貴方の子種が……」

王は胸の高鳴りとともに、小鬼の
挿入を待った。



「くふう……っ♡ こ、これは……！」

その小柄な体軀からは想像もつかないほど
ゴブリンの交尾は激しく、遅しかった。

王は全身を走る快感にしびれる。

「ううっ……♡ よ、良いです♡」

嬌声をあげる王の言葉などお構いなしに、
ゴブリンたちは勝手な交尾を続ける。

そのがむしゃらな行為が、余計に
王の身体に熱をとめていく。

「い、息抜きのつもりでしたがっ……」

駆け上がってくる快感に、もはや絶頂を
抑えることはできなかった。
ゴブリンの巣穴の中で、王ははしたなく
絶頂し、愛液をまき散らした。



何度、交尾を繰り返しただろうか。
何しろ、ゴブリンたちは大勢いて、
しかもそれぞれが絶倫なのだ……。

「も、戻らなくては、いけませんね……」

立ち上がる足に力はいらない。
だが、気力を振り絞り、王は身を起こした。

なおもまとわりつく小鬼たち。

「また……来ますから……ね……？」

やさしい声で、そう約束した自分の言葉に、
王は驚いていた。
自分の中に決定的な何かが刻まれたことを
王は自覚した。

先に待つのは破滅か、それとも幸福か……。



それから、幾たびも同じことが繰り返された。
ゴブリンの巢穴を訪れては、
彼らの欲望に王は身を任せる。

鎧を脱ぐ時間も惜しみ、
最初から軽装で訪れることもあった。

そうするうちに、王の中では
一つの感情が膨らみつつあった。
王として、いや人としてあるまじき、
口に出すのもおぞましい感情……。

ゴブリンの子を孕みたい——。

今や、王の心はその一念によって
占められていた……。



そして、ついにその日が来た。
王は森の途中に鎧を捨て、
さらには服も脱ぎ捨て、裸になる。
もう自分には必要ない。

ゴブリンの巣穴に急ぐ。

「……今日はお願いがあって来ました」

すっかり警戒心なく、穴から出てくる
小鬼たちに、王は声をかける。

「あなたたちの群れに加えてください」

王の言葉は理解されていないだろう。
ゴ布林たちはただ目の前の雌の身体に
むらがっているだけだ。
だが、王はそれでも満足そうに頷くと、
ゴ布林を抱き上げる。

しろ…



「貴方はいつも真っ先に来てくれますね」

王が来ると必ず交尾にくる個体だった。長く観察していると、ゴブリンたちにも個性があることがわかってくる。

「私が気に入りましたか？」

王はそう言うと、愛おしそうにその小鬼と口づけをかわす。ちゅっ、ちゅっという音が洞穴に響く。

他のゴブリンたちもチンポを立てて、王の身体にこすりつける。まるで、交尾の予約をするかのようだ。王は頷き、洞窟の奥に入ってしまった。

しう...

ハッ
ハッ



「好きなだけしていいですよ」

洞窟の暗がりの中で、王は尻を突き出し
ゴブリンを誘惑する。
これまでは、時間を気にした交尾だった。
しかし、これから違う……。
昼夜、飽くことなく犯され続けるだろう。

そして、それこそが王の望みだった。
ゴブリンたちの、雌になること……。

普段よりひときわ強く、
発情した雌のニオイを股から発している。

先ほどのゴブリンの個体が、王の股の
割れ目を舐めながら、ペニスを硬くする。

「欲しいのです。貴方の子種が……」

王は胸の高鳴りとともに、小鬼の
挿入を待った。



ゴブリンは猛然と尻に抱き着くと、
小さな体躯に似合わぬ大きな生殖器を、
王の秘所の割れ目に突きこんだ。
そのまま、がむしやりに腰を振る。

「はあんっ……♡ やん♡」

甘え、媚び、あるいは、愛情か。
とろけた声が王の喉から漏れる。
王の柔らかい体に小鬼は夢中だ。

「上手です、とっても良いですよ♡」

王は自分を犯すゴブリンに愛おしい視線を
注ぎながら、ゴブリンを優しく励ます。

おそらくは一方通行の愛情だろう。
だが、たしかに王の心は満たされていた。

「ください、貴方の精子をっ……♡」

王は小鬼に甘え、おねだりした。



小鬼の腰が何度も尻に叩きつけられる。
そのたびに、快感が波となって、
王の背中を走り、脳髓を満たしていく。
これまでに経験したことのない、
強烈な快感が、まるで光のように、
王の意識を貫き、焼き尽くす。

「おっ、おおおおっ！！♥」

気づけば、王は咆哮をあげていた。

その声に合わせるように、
ゴブリンも激しく射精をした。
ゴブリンのねばつく精液が、
王の膣口から一気に流し込まれていく。

「あっ……♥ あっ♥ はあっ♥」

絶頂の余韻も冷めやらぬうちに、
すぐに次のゴブリンが、自分の一物を
王の割れ目に突き入れた。

風評に反して、異種族であるゴブリンと人間では妊娠の確率はそう高くない。ゴブリンに捕まった乙女が孕まされるのは、四六時中犯され続けるからだ。

「ちゃんと孕めるでしょうか……」

王は優しく傍らのゴブリンの頭を撫でた。もっとも、孕むまで交尾すればいいだけだ。

時間ならいくらでもある。



「おや、貴方は……？」

股を広げる王の前に歩み出たのは、今までは洞窟の奥に隠れていた個体だった。臆病なのか、慎重なのか。それとも照れ屋なのか……。

ようやく警戒を解いたということか。王は微笑み、割れ目を大きく広げる。

「大丈夫、あなたの番ですよ。」

「んっ……♡ ふうっ……！」

奥手なゴブリンは、今まであまり交尾にありついたことがなかったのかもしれない。ペニスを王の秘所にあてがうと、夢中で腰を動かし始めた。

「そうっ……♡ 上手ですよっ……♡」

そくそくそく

すっ♡

すっ♡

がっ♡

王の身体を、相反する感覚が満たす。墮ちていく自分にゾクゾクとする感覚。王でありながら、魔物に体を任せ、あまつさえ孕もうとしている。最低の、破廉恥な王……。

同時に、どこか母性のような温かい気持ちも王の中に生まれていた。この小さな魔物たちを慈しみ、彼らの子を産むことは、それほどいけないことなのだろうか……？

「おほおおっ♡」

何度も何度も、繰り返し精液を注がれ、
王は何度も絶頂する。
身体はゴブリンとの交尾を受け入れ、
ねっとりした欲望と快感を覚えこんでいく。
強烈な多幸感が王の全身を満たしていく。



洞窟のすべてのゴブリンたちが
満足するまで犯され続け、どれほど
時間が経っただろうか……。

「少し……休憩ですね……♡」

全身をゴブリンの精液に満たされて、
王はやっと満足感と安心感を覚えた。

身を起こすと、ゴブリンたちが抱き着いて、王の身体を舐める。いつもの個体は、首に手を回し、顔と顔を近づけてきた。

「どこにも行きませんよ……♡」



ゴブリンの頭を撫で、恋人のように優しく唇をついばみ、舌を絡ませる。その時、下腹部に温かな感覚が走った。

「あっ……♡ 今……受精した……♡」

妄想、錯覚かもしれない。だが、王は自分の身体の奥、子宮の中で自分の卵子とゴブリンの精子が結びつくのを確かに感じた。

はたして、その直感の通りだったのか……。
数か月後、王の腹部は大きく膨らんでいた。
どの個体の子供かはわからない。
だが王にとっては別に構わなかった。

これから、何人でも生むつもりだから。

孕んでからも、ゴブリンたちとの
交尾は絶えることなく繰り返された。
大きくなった乳房からは、すでに母乳が垂れ、
ゴブリンたちはそれを好んで飲んだ。



「子供の分も残してあげてくださいね……♥」

お腹を撫でながら、王はゴブリンたちに
自分の母乳を与える。一匹が、口に含んだ母乳を
王に口移しに飲ませてくる。

王は微笑みながら、ゴブリンの口に吸い付いた。



ゴブリンたちは、彼女を女王蟻のように扱っていた。
食事や身体の世話をし、代わりに交尾という
報酬を受け取るのだ。

「さあ、今日もどうぞ……♥」

大きなお腹が地面に触れないように気を付けながら、
王はゴブリンたちに向かって尻を突き出す。
すっかり熟れた女性器が、雌の匂いを振りまいた。

「今日も貴方が一番ですね……♥」

いつもの個体が真っ先に王の股に口づけをした。
群れの中でも王の身体にひととき執着している。

「貴方がこのお腹の子の父親なのですか……？」

優しく王は問いかけるが、言葉は伝わらないのだろう。
ゴブリンは王の問いかけに答えず、勃起したペニスを
王の女性器にねじ込んだ。

「ふうんっ……♥ はあっ……♥」

実際、判別する方法もないのだろう。

まあ、群れのどの個体の子供だろうと、結局は
どうでもいいことだった。



「あっ♡ あっん♡ あっ♡」

何度も繰り返されたゴブリンとの交尾に、
王は今日も甘いあえぎ声をあげる。

魔物に求められ、ただ交尾のために日々を過ごす。
かつての自分を知るものから見れば、
受け入れがたい裏切りに映るだろう……。

それでも、王は自分の選択を後悔はしなかった。

自分は王として一国を導く器ではなかった。
ならば、こうして洞穴の暗がりの中で
ゴブリンたちとまぐわっている方が、
よほど世のため、民のためでもあるだろう。

「ああ、幸せです……♡」

ただ自分の身体を求めるゴブリンたちに、
王は微笑みを向けた。

「ふうー……♡ふうー……♡」

出産の時が来た。

王はゴブリンたちの作った寝床に体を横たえ、大きく股を広げて我が子が生まれるのを待つ。

既に最初の子の頭が見えていた。



ゴブリンの赤子は小さく、同時に何体も孕む。出産はそれほど苦労しなかった。王は次々と、五体の子供を産み落とした。ゴブリンたちは子供を抱え上げると、王の乳房に吸い付かせて、赤子に初乳を与えるのだった。

「私の、赤ちゃんたち……♡」

腹を痛めて子を産むとはこういうことか。母になった王は、感慨深くゴブリンの赤子の頭を優しくなでた。

王の謎の失踪から数年が経ち、
王国の混乱も落ち着いた頃――

一人の騎士は、森の奥深くで「それ」に出会った。
ゴブリンたちに守られる、金髪の妊婦……。
かつて失踪した王と瓜二つの女性だった。

彼女はゴブリンたちを「我が子たち」と呼び、
自分たちは静かに森の奥で暮らすので、
どうか見逃してほしいと言った。
さもなくば、貴公を討つしかない、とも。

騎士はかつての王の姿に、膝からくずおれと、
とめどなく涙を流した。
王はそんな騎士に寄り添うと、優しく手を取り、
我が王国の民を頼みます、と言って静かに微笑んだ。

騎士は森を去り、生涯このことを誰にも話さなかった。

いつしか、その森は「王の森」と呼ばれ、
そこに住む魔物は人を襲うことがなかったという。

終

2026.08.16
ROYALBITCH



